

6課

5月7日

アブラハムのルーツ



安息日午後 4月30日

暗唱聖句

信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです。(ヘブライ人への手紙 11:8、新共同訳)

信仰によって、アブラハムは、受け継ぐべき地に出て行けとの召しをこうむった時、それに従い、行く先を知らないで出て行った。(ヘブル人への手紙 11:8、口語訳)

今週の聖句

創世記 12 章、イザヤ 48:20、イザヤ 36:6、9、エレミヤ 2:18、創世記 13 章、創世記 14 章、ヘブライ 7:1~10

今週のテーマ

私たちはいよいよ創世記の真ん中にやって来ました。この中心部分(創12~22章)は、「行きなさい」「レーフ・レハー」(創12:1)との神の最初の召しで始まるアブラハムの旅を含む箇所です。この旅は、神の二度目の「行きなさい」(創22:2)との召しへと向かうものです。アブラハムに彼の過去に別れを告げることとなったこの一度目の召しは、(彼の息子の中にあると思われた)未来をも手放すようにという二度目の召しへと導きます。結果として、アブラハムは常に旅を続ける寄留者でした。神が彼を「よそ者」とも呼ばれるのはそのためです(創17:8、英語欽定訳)。

過ぎ去った過去も、まだ見ぬ未来もない空しさの中で、アブラハムは宙に浮いたような状態でした。アブラハムの信仰の旅を形作る二つの召しの間で、彼は「恐れるな」(創15:1)との神の再保証の御声を聞きます。この三つの御言葉〔二つの「行きなさい」と「恐れるな」〕は、アブラハムの旅を三つに区切るしるしとなっています。それぞれの部分については、6課、7課、8課で学びます。

アブラハムは信仰の模範であり(創15:6)、ヘブライ語聖書では、信仰の人として覚えられます(ネヘ9:7、8)。新約聖書では、アブラハムは旧約聖書を代表する人物として最も多く引用されています。今週から3週にわたって、その理由を学んでいきましょう。

問1 創世記 12：1～9 を読んでください。神はなぜアブラムに故郷と家を離れるよう召されたのでしょうか。アブラムはこの召しにどう応えますか。

アブラム以前に、神が人に最後に語りかけられたのは、聖書の記録によれば、ノアに対してでした。それは、大洪水の後にノアを安心させるためのもので、再び世界規模の洪水が来ることはないという、神がすべて肉なるものとの間に立てた契約でした（創9：15～17）。神がアブラムに語った新しい言葉は、**地上のすべての氏族**がアブラムを通して祝福されるという約束に、再び結びつきます。

この預言の成就是、過去からの決別をもって始まります。アブラムは、彼が慣れ親しんだすべてのものの、彼の家、国、それらの彼の一部とも言えるものにさえ別れを告げます。この文脈の中で7回も繰り返されている「行きなさい」というキーワードに、この命令の強さが表されています。アブラムはまず、彼の故郷「カルデアのウル」を離れますが、それはバビロンの都市でもありました（創11：31、イザ13：19）。この「バビロンを出よ」との召しは、聖書の預言の中でも長い歴史を持つものです（イザ48：20、黙18：4）。

アブラムの旅立ちは彼の家にも関わることでした。アブラムは、彼の先祖から受け継いだ財産と、彼が祖国の伝統、教育、感化を通して学び、獲得したものの多くを捨てて行かねばなりませんでした。

しかし、神の行けとの召しはさらに多くのものを巻き込むものでした。「行きなさい」を意味するヘブライ語の「レーフ、レハー」は、文字通り訳せば、「自ら行きなさい」または「自分自身のために行きなさい」という意味があります。アブラムのバビロンからの旅立ちは、彼を取り巻く環境や家から離れること以上のことでした。このヘブライ語の表現では「自分自身」が強調されています。アブラムは**自分自身**から出なければならぬのです。それはバビロンという過去を含む彼自身を捨てるためでした。

この「放棄」の目的は、神が彼に見せてくださる「地」に行くためです。この「地」という言葉は、イサクを犠牲として献げる文脈の中で再度用いられることとなります（創22：2）。それはモリヤの山を意味し、そこでイサクは献げられ、エルサレムの神殿が建てられるところでもあります（代下3：1）。神の約束は、単に物理的故郷についてだけでなく、世の救いの約束でもあるのです。この思想は、すべての氏族に対する神の祝福の約束の中に再確認されます（創12：2、3）。「祝福する」と訳されている動詞「バーラハ」はこの箇所にも5回出てきます。この普遍的祝福はアブラムの「子孫」によって実現します（同22：18、26：4、28：14）。この聖句がここで意味する「子孫」は、究極的にはイエス・キリストにおいて成就します（使徒3：25）。

あなたの人生の中で、神が捨てるようにお求めになるものは何でしょうか。

問2 創世記 12：10～20 を読んでください。アブラムはなぜ約束の地を離れてエジプトへ行ったのでしょうか。ファラオはアブラムに対してどのような待遇をしましたか。

皮肉なことに、約束の地に着いたばかりのアブラムは、「その地方に飢饉^{きん}があった……ので」（創12：10）、エジプトに行くことを決めます。飢饉の折にたびたび人々がカナンからエジプトに行ったことは、エジプトの古文書が証明しています。エジプト中王国時代（紀元前2060～1700年）の文書である「メリカレの教え」の中に、カナンからの民は「あわれな乱暴者」と呼ばれ、「みすほらしく……、水がなく……、1か所に定住せず、食糧のためならどこにでも行く」と書かれています（ミリアム・リヒティム『古代エジプト文学』第1巻「古王国と中王国」103、104ページ、英文）。

エジプトの誘惑は、古代イスラエルにとってしばしば問題でした（民14：3、エレ2：18）。すなわち、エジプトは、人間が神よりも人間に頼ることの象徴でした（王下18：21、イザ36：6、9）。エジプトでは、水が潤沢で、信仰は必要なく、土地の実りは目の前にありました。神がアブラムに言われたこととは裏腹に、干ばつにあえぐ土地と比べて、エジプトは良い所のように思えました。

カナンを離れるアブラムは、ウルを離れたアブラムとは違っていました。以前、信仰の人と評されたアブラムは、神の召しに応じてウルを離れましたが、今、アブラムは自分の意志によって約束の地を離れるのでした。以前のアブラムは神に頼っていましたが、今、彼は自分自身と自分の経験のみを頼りとし、人を巧みに操り、道義に反する政治家のようでした。「アブラハムは、エジプトに滞在していた間に、彼がまだ人間的に弱く、不完全であるという証拠をあらわした。彼は、サラが妻であることを隠して、神の守護に対する不信を示し、これまで彼の生涯において何度となくりっぱに示されたあの大きい信仰と勇気を欠いたのである」（『希望への光』63ページ、『人類のあけぼの』上巻128、129ページ）。

私たちはここに、偉大な神の人であっても過ちを犯し、しかしなお神はその人をお見捨てにならない例を見ます。新約聖書がアブラハムを恵みによる救いの実例として語るとき、彼の救いはただ恵みによることを意味します。もしそれが恵みのゆえでなかったなら、アブラハムには、私たちと同じように、希望はなかったでしょう。

どんなに信仰深いクリスチャンであっても、いともたやすく正しい道を踏み外すことについて、この物語は私たちに何を教えているのでしょうか。神に従わないことは、なぜ決して良い選択とは言えないのでしょうか。

問3 創世記 13：1～18 を読んでください。この物語は品性の重要性について何を教えていますか。

アブラムは以前彼がいたところに戻ります。彼のエジプトへの旅は単なる不適当な回り道でしかありませんでした。神とアブラムの歴史は、彼の約束の地への最初の旅で立ち止まった所から再び始まります。アブラムの最初の宿営地はベテルでした（創13：3）。それはちょうど彼の最初の旅のようでした（同12：3～6）。アブラムは悔い改め、「自分自身」に、信仰の人アブラムに戻ったのでした。

神に立ち帰ったアブラムの人柄は、すでに土地の利用に関する問題で、甥のロトとのやり取りに表れています。彼は平和的な合意によって、ロトにまず土地を選ばせます（同13：9、10）。そこに表された寛容と親切は、彼がどんな人物であるかを示しています。これこそが本来のアブラムでした。

ロトはよく潤った平野（同13：10、11）を、将来隣人になる人々の邪悪さについては何も考えずに、最も安易で、自分に都合の良い選択をします（同13：13）。この選択は彼の欲深い品性を表しています。彼が平野を「自分のために」〔創13：10、英訳聖書〕選んだことは、洪水前の人々がやはり「自分たちのために」（同6：2）人の娘たちを選んだことを思い起こさせます。

これに対して、アブラムの行為は信仰によるものでした。彼は自分から土地を選びませんでした。それは神の恵みによって彼に与えられたものでした。アブラムは、ロトのように自分からでなく、神の命令によって初めてその土地を見ました（創13：14）。それは彼がロトと別れて、神が再び彼に語られたときでした（同13：14）。実は、これが、ウルでの召命以来、神がアブラムに語られた最初の記録です。「主は、ロトが別れて行った後、アブラムに言われた。『さあ、目を上げて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。見えるかぎりの土地をすべて、わたしは永久にあなたとあなたの子孫に与える』」（同13：14、15）。そして神は彼に、割り当てられた者としてこの地を「歩き回る」ように促します。「さあ、この土地を縦横に歩き回るがよい。わたしはそれをあなたに与えるから」（同13：17）。

しかし主は、その土地をアブラムに与えるのは神ご自身であることを明確にされます。それは賜物、すなわち恵みの賜物であり、アブラムは信仰、すなわち服従へと導く信仰によってのみ、それを受けるにふさわしい者とならねばならないのです。ここで神がアブラムに約束されたすべてのものを実現するのは、ただ神の業だけなのです（創13：14～17）。

私たちはどうすればだれに対しても寛容で、親切でいられるでしょうか。

問4 創世記14:1~17を読んでください。約束の地が与えられた直後に起きたこの戦いは何を意味しますか。この物語はアブラムについて何を語りますか。

これが聖書に記録されている最初の戦いです(創14:2)。メソポタミアとペルシアの四つの国の軍隊が同盟を結び、対するソドムとゴモラの王を含む(同14:8)五つのカナン^{かん}の国の軍事同盟と衝突したのですから、これは大規模な戦いだったのでしょうか(同14:9)。この軍事作戦の理由は、カナン人たちがバビロンの封建領主である王たちに対して謀反を起こしたということです(同14:4、5)。この物語は一つの歴史的な抗争を意味しますが、この「世界」戦争のタイミングが、神がアブラムに約束の地という賜物を与えた直後であったことを考えると、この出来事には特別な霊的な意味があります。

これだけ多くのカナンの国々の民が巻き込まれたということは、この抗争の目的がカナン全域の主権に関わるものであったことをうかがわせます。皮肉なことに、唯一その土地の真の所有者であるという意味で、本当に利害関係のある当事者であったアブラムの宿営は、少なくとも初めは、この抗争に巻き込まれていない唯一の勢力でした。

アブラムが中立であった理由は、彼にとって約束の地は軍事力や政治的策略によって手に入れたものではなかったからです。アブラムの王国は神からの賜物でした。アブラムがこの戦いに介入する唯一の理由は、捕虜になり、この戦いに巻き込まれた甥のロトの運命がかかっていたからです(創14:12、13)。

「アブラハムは、マムレのテレビンの林の中で平和に暮らしていたが、戦場からにげてきた者から、戦況と、彼のおいにふりかかった災難を聞いた。彼は、ロトの忘恩を不快に思っていなかった。彼のロトに対する愛情がすべて呼びさまされ、彼を救い出そうと決心した。アブラハムは、まず、神の助言を求めて、戦いの準備にとりかかった」(『希望への光』65ページ、『人類のあけぼの』上巻135ページ)。

しかしアブラムは、同盟全体に戦いを挑むことはしません。作戦は素早く夜間に行われねばなりませんので、彼はロトが捕虜になっている宿営だけを攻撃します。ロトは救出され、ソドムの王はアブラムの味方になります。こうして、この神の信仰の人はまた、すばらしい勇気と不屈の精神を示しました。疑いなく、この地域における彼の影響力は増し、人々は彼のような人物を見て、彼が仕える神についてさらに多くを学んだのでした。

私たちの行動は他者に対してどのような感化となっているでしょうか。私たちの行動は私たちの信仰についてどんなメッセージとなっているでしょうか。

問5 創世記14:18～24とヘブライ7:1～10を読んでください。メルキゼデクとはだれでしょうか。アブラムはこの突然現れた祭司に、なぜ彼の持ち物の十分の一を贈ったのでしょうか。

この神秘的なメルキゼデクの出現は、場違いなものではありませんでした。アブラムはカナン¹の王に謝意を表した後に、この祭司に彼の持ち物の十分の一を贈ります。

メルキゼデクは「サレム」の町から来ましたが、その意味は「平和」ですから、戦争の混乱の後にふさわしい意味だといえます。

メルキゼデクという名前の「ゼデク」は「正義」を意味しますので、ソドムの王、ベラ（邪悪な）やゴモラの王、ビルシャ（不正な）とは対照的です。おそらくこれらの名字は彼らの人格を表していたのでしょう（創14:2）。

メルキゼデクはカナンの王たちに代表される暴虐や邪悪とは正反対の存在として現れます。この箇所はまた、聖書で最初に「祭司」という語が登場する場所でもあります（創14:18）。ここでメルキゼデクは「いと高き神の祭司」（同14:18）と呼ばれています。「いと高き」はアブラムが自分の神を呼ぶときの呼称ですから（同14:22）、明らかに、アブラムは彼を、彼が仕える神の祭司と認めていたことがわかります。しかしながら、このメルキゼデクはキリストを意味すると考えるべきではありません。彼は当時の人々の中に生きた神の代表者でした（『SDA聖書注解』第1巻1092、1093ページ、英文参照）。

メルキゼデクは実際に祭司としての公の務めをしています。彼は「パンとぶどう酒を持って」来ましたが、このぶどう酒はしばしば、搾りたてのグレープジュースの使用を意味し（申7:13、代下31:5）、再度、什一を献げる文脈で出てきます（申14:23）。この務めに加えて、彼はアブラムを祝福します（創14:19）。

一方、アブラムは「天地の造り主」（創14:19）、創造主なる神への応答として「すべての物の十分の一を」彼に贈ります（同14:20）。この呼称は天地創造の物語の導入部を暗示していますが（同1:1）、「天と地」は全体または「すべて」を意味します。このように、この呼称は、すべてのものを所有しておられる創造主への感謝の表現であると考えられます（ヘブ7:2～6を創28:22と比較）。この什一は、逆説的に礼拝者が神に献げる贈り物ではなく、神からの賜物を意味します。なぜなら、神は初めから私たちにすべてを与えてくださっているからです。

什一を献げることは、なぜ信仰を養うために重要な行為であると同時に、間違いない信仰の指標となるのでしょうか。

参考資料として、『人類のあけぼの』第12章「カナンにおけるアブラハム」を読んでください。

「キリストの教会は祝福となるために存在している。その教会員は彼らが他者を祝福することによって、祝福されるのである。神が全世界を前に一つの民を選ばれた目的は、神が彼らを神の息子、娘とするためだけでなく、彼らを通して世界を天来の光という利益に浴させるためであった。主がアブラハムを選ばれたとき、それは単に彼を特別な神の友とするためではなく、主が周辺諸国の上に与えようと望まれた尊く特別な特権の媒体とするためであった。彼は、彼を取り巻く道徳的暗黒のただ中であって光となる。

神がその子らを光と真理で祝福されるところならどこでも、彼らは永遠の命を持つようになるだけでなく、彼らの周りにいる者たちもまた霊的な光に照らされるのである。……『あなたがたは地の塩である』。神がその子らを塩にされるとき、それは彼らを腐敗から守るためだけでなく、彼ら自身が他者を腐敗から守るための保存料となるのである……。

あなたは神の宮の生きた石として輝いているだろうか。……私たちは、それがあらゆる仕事上の取引において、私たちの上に及ぶ感化とならない限り、真の宗教を持っているとは言えないのである。私たちの人生の隅々にまで、役に立つ信心が織り込まねばならない。私たちの心に、キリストの変革する恵みを持たねばならない。私たちはもっともっと自己を捨て、もっともっとキリストを求めねばならない」(エレン・G・ホワイト『キリストを映しつ』205ページ、英文)。

話し合いのための質問

- ① 「わたしは……あなたを祝福し、……あなたは祝福の基となるであろう」(創12:2、口語訳) とのアブラムの祝福を考えると、祝福されるとは何を意味するのでしょうか。私たちはアブラムが仕えた同じ神に仕える民として、どうすれば他者の祝福となることができるのでしょうか。
- ② 「異母」妹であり、妻であったサライについてアブラムがついた「部分的な嘘」は、どういうところが問題だったのでしょうか。ただ嘘をつくことと、真実を含んだ巧妙な嘘をつくこととは、どちらがより悪いことでしょうか。
- ③ もう一度、創世記14:21～23から、ソドムの王の申し出に対するアブラムの返事を読んでください。彼はなぜこのように応じたのでしょうか。この物語からどのような重要な教訓を学ぶことができますか。ソドムの王の申し出を受けていたとしたら、アブラムは義とされていなかったでしょうか。

夢の結婚

ルツが宣教師として第一歩を踏み出したのは、イエス様に生涯をささげ、バプテスマを受けた中学1年生のときでした。翌年、自分が所属するセブンスデー・アドベンチスト教会の掃除をしてほしいと頼まれたのですが、掃除について何も知らなかったので、代わりにピアノの前に座りました。ピアノを弾きながら救い主を賛美したとき、会衆席にあらゆる国々の人々が座っている姿を想像しました。その時、彼女と共に演奏し、歌ってくれる男性と結婚したいという、祈りに満ちた希望が頭に浮かびました。しかし、それは一体誰でしょうか？

15歳のとき、新婚旅行から帰って来た姉が、ウエディングドレスを少し着ただけで、目を両手で覆い、むせび泣いているのを見ました。ルツは、同じような経験をしないよう、将来の夫に求めたい条件のリストを作り始めました。母は、そのリストについて知り、賢いアドバイスをしてくれました。「ルツ、あなたもその男性が望むような女性にならないとね」。ルツは、将来の夫に期待することを、自分も身につけることができるように祈り求め始めました。しかし、それは一体誰でしょう？

アンドリュース大学に入学する直前、ルツは一時的に婚約していたのですが、破談になってしまいました。その数か月後、別の男性とお付き合いを始めましたが、彼が他の女性とデートしていたことがわかり、別れました。

その冬、学生寮でキャロリングに行くのを待っていたとき、「エミル・モルドリックが来てるわ！ 彼の車に乗りましょう！」と友人が叫びました。ルツが「誰？」と尋ねると、「知らないの？ 彼は、歌いオルガンを演奏し、牧師になりたがっているのよ」と友人が教えてくれました。ルツは、「その人だ！」と思いました。

それから数時間、ルツはソプラノ、エミルはテナーを歌いました。彼女は、心の中で新しい喜びを感じ、彼の目から視線を離すことができませんでした。歌っている間、エミルはルツの視線に答え、次の晩にデートを申し込みました。

今日、エミルとルツ・モルドリックは、60年近く結婚生活を送り、15か国以上で神様に仕え、宣教師として歌い、楽器を演奏してきました。エミルは、のこぎりとオートハープなど12の楽器を演奏します。夫妻は、ウクライナだけでも10回訪れ、結婚式、英語のクラス、聖書研究会を指導しました。彼女が誰もいない教会で歌った日を思い出すとき、夢を実現してくださった神様を賛美するのです。「私は、実際に世界中で歌い、演奏しました。神様が私の祈りに応えてくださったからです」と、彼女は言います。(ユリア・ボンダレンコ)

